



あきらめなかった男

こまえりょう
小前亮作

おとないちあき絵

せいざんしゃ
静山社

天明二年十二月、光太夫たちを乗せた「神昌丸」は、江戸に向かう途中嵐にあう。半年間も北へ流されつづけた後、ロシアのアムチト力島に流れ着いた。光太夫たちは飢えや病気で仲間を失いながらも、辞書をつくって少しずつ言葉を学び、日本に帰ることをあきらめなかった。

「絶対に、生きて日本に帰るんだ」という船乗りの磯吉の思い、そして光太夫の強い意志と粘り強い交渉力が、光太夫をロシア皇帝工力チエリーナ二世への謁見に導き、二人の未来を好転させていく。

